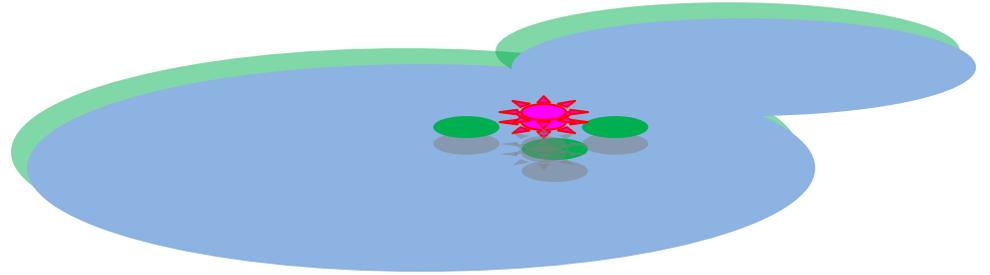


しゅう せん か にっ き
周 旋 家 日 記 (2)

仏教との再会—退蔵院襖絵プロジェクト

乾 明 紀



新しい価値づくりのために人を紹介したり、想いをカタチにしたりするために人を支援する「周旋活動」は、私自身が主役にならない場合が圧倒的に多いものだ。自分が主役にならないことについて、私は人間が出来ていないので、寂しい想いや悔しい想いをすることもある。しかし、その一方で、それまでの私が持っていなかったビジョンや価値観に出会う楽しみがある。また、私が知らない世界のことを非常によく知っておられる「その筋の専門家」の方の想いをカタチにすることは非常に刺激的だ。どんなに手間暇がかかっても周旋活動について手を出してしまうのは、この出会いが楽しく、自分を大きく成長させてくれることを脳が記憶してしまったからだろう。

「その筋の専門家の想い」が非常に魅力的であれば、「想いをカタチにしていく」という援助行動は強く駆動される。そして、その過程で私は大きく学ぶのである。私にとって大きな学びとは、他者の価値観を自らに取り入れることと、オーダーメイド的に実行される「想いをカタチにしていく」援助行動を通じて、自らの手で方法論を発見していくことである。この2つがたまらなく面白い。余談だが、この面白さを教育の仕組みの中に入れようとしているのが、サービス・ラーニングというものだろう。立命館大学にも2008年にサービス・ラーニングセンターというものが立ちあがったが、私もサービス（援助）しながら、大いに

ラーニングしているのである。

さて、私にとって周旋活動は、事の大小を問わず常に自分を成長させてくれる存在であるが、ときに私の人生に大きなインパクトを与えてくれるものがある。ここ最近の周旋活動の中にも、そんな予感を覚えたものがある。それは周旋活動を通じた「仏教との再会」である。

「再会」としたのは、私は子供のころ浄土真宗の寺院を拠点にボーイスカウト活動をしていたし、前々任校は、佛教大学だったからである。しかし、深く仏教に帰依していたわけではなく、浄土教についてもほとんど無知と言っても過言ではない人間だった。そんな私が、仏教と本格的に再会したのは、2010年に、妙心寺の塔頭、退蔵院の副住職と京都市が主催するある審査会でご一緒したご縁であった。

私と副住職は、京都市の未来像をアートやデザインの力で政策提言されたものを評価する審査員であった。当時、私は京都造形芸術大学の教員で若手アーティストの支援活動（これもナカナカ面白い取組みだったのでいずれは紹介したいナ）をしていたので、そんな活動を紹介したりしながら副住職と話をしていると「うちのお寺には慶長年間の方丈に、慶長年間の襖絵があるのですが、これは重要文化財であり、常に外に出しておくとうらやまが傷んでしまいます。だからといって襖を外して

おくと耐震的にも弱くなるので、普段は、白い襖をいれているのですが、それでいいのかって思うのです。だから、芸大生に何か描いてもらうことってできないですかねえ？」ということをおっしゃった。周旋家の血が騒ぐ瞬間である。仏教との再会はこんな会話から始まった。もちろん二つ返事で「できますよ！」と答えた。

早速大学に戻り周旋活動に入った。私は周旋とマネジメントのプロだがアートの専門家ではないので、その筋の専門家の知恵と実践を借りなければこの企画は完成しない。京都造形芸術大学は、感度の高い教員が多いので、周旋に全く苦労はなかった。私の上司であったプロジェクトセンター長に相談し、現代アーティストの椿昇氏をディレクターに迎えた。芸術と社会の関係をストイックな姿勢で考え続け、創作活動をしている椿氏は、「パンクなアーティスト」（山口,2002）とあだ名される人物であり、最初から鼻息が荒かった。

周旋活動には、消極的な人を積極的にするところから周旋する場合と積極的な人同士を周旋する場合がある。今回は、100%後者だ。ストイックに価値創造をする喜びを知っている「禅の専門家」と「アートの専門家」の出会いは、周旋家という触媒が必要ななかったかのように化学反応を始めた。私はいつのまにか周旋家から傍観者になっていた（マネジメントはしていた

が…。傍観者になれるのが最高の周旋なのかもしれない。

禅とアートは、いずれもが行動を伴いながら、世俗的なものからの超越を目指すものである。前者は厳しい修行を通じ、後者は売れる保障のない創作活動を通じそこに至ろうとする。そんな両者の融合が、社会的地位を超えた、最高の価値の創造に向かうのは必然であろう。副住職は、「自分の目が黒いうちには価値がわからないものを創りたい。この時代では評価できないもの、100年先の未来に残るようなものが残せたら」と語った。これが、今回のプロジェクトで求める作品の質となった。

一方、アーティストでもあり、大学教授でもある椿氏は、この取組にある狙いを持っていた。「欧米ではアートは市民の買って飾るという自然な楽しみに支えられていますが、日本では明治以後『芸術』は特別なものとされ、市民は遠ざけられてしまいました。結果的に若い画家が生きてゆけないという19世紀までの日本は考えられない貧弱な環境」になったことを嘆き、「京都という歴史のある土地に眠っていた歴史的資産と芸術系大学やアーティストが集中するという状況を融合させ、多くの若い画学生に誇りと夢を与え、欧米マーケット主導のまま内需システムを構築できなかった我が国のいびつな状況に一石を投じる」（椿,2011）ことであった。「いろんな

人に勇気を与え、社会を活性化する。あなたはなにしろクレイジー！」（山口,2002）とも言われる椿氏である。この取組も彼にとってはひとつの作品であり、内なる想いが爆発していた。アーティストのモチベーションと禅の関係について、仏教学者の鈴木大拙（1940）は、次のように述べている。「芸術的衝動は道徳的衝動より原始的であり、生得のものである。芸術の訴える力は端的に人間性に食い込む。道徳は規範的だが、芸術は創造的である。一は外部からの挿入で、一は内部からの抑えがたい表現である。禅はどうしても芸術と結びついて、道徳とは結びつかぬ。禅は無道徳（unmoral）であっても、無芸術（without art）ではありえない」。

傍観者になった私には、副住職と椿氏が私にとっての老師だった。そして、2人の言動を通じて、お釈迦様が私に「お前はどこに向かって生きようとしているのか？」と質問されているように思えた。

鈴木大拙（1940）『禅と日本文化』北川桃雄訳、岩波新書、

椿昇（2011）『退蔵院 21世紀障壁画プロジェクト企画書』

山口裕美（2002）『現在アート入門の入門』、光文社新書